調 査 研 究

人 口 資 質 問 題 論

——日本人の性格問題を中心として——

篠 崎 信 男

1) ま え が き

人口資質問題についての概略の輪郭については既に『人口問題研究』及び『人口問題研究所年報』に言及してあるので重複を避けたいが，人口資質研究の要因の中で最も今日まで手がつけられなかった問題が実はパーソナリティーやキャラクターの分野であった．

そこで斯る側面の一端を探るために昭和44年の実地調査の一部に社会心理的側面から調査事項を加味することによって問題点の発見に努めることとした．詳細は実地調査報告資料として「都市および農村における家族構成と就業形態の変化に関する調査報告」の第2分冊に基礎的な集計結果表を載せているので参照されたい．また昭和45年の人口問題年報に年齢別に見た問題点は要約して記載しているため，本稿では「性格」というものを中心にして諸種の問題を掘り下げて見たいと考える．

Character という言葉はギリシヤ語で二つの意味を持ち一つは名詞として他は動詞として使われるが，いずれも，それは mark ということであると言われている．つまりしるし，目安，特徴，痕跡といったもので，この言葉が一般に通用し出したのは Theophrastus(297 BC)の仕事で moral character という言葉が最初ではないかとも言われる．したがって一般的な恒常的な一つの姿とも解せられ，この中には，気質（temperament）とか，人格（personality）更に品行性（morality）というものが加味されているとも考えられる．

つまり人格とか気質とか品行というものはある場所ある時間という特定の時期における個人の限定された姿に対し性格は，これらの要因を含みながら，これらの背景や行動を綜合した，その人なりに示される一般恒常的な傾向，または類型という考え方でまとめられる概念でもあろう．

したがってどういう窓口から，これらの性格特徴をつかまえて行くかという性格判定が問題とならざるを得ない．また今までの性格分類の類型化の研究には多くのものがあり，心理学的な通路，生理学的なもの生体人類学的なものと多様である．形質的な研究線としては C. Lombroso が1872年に既に犯罪性格と結びつけて行なっており，また E. Kretschmer, E. Kraepelin, H. Apfelbach なども，生物病理学的な立場から性格類型について基本分類を試みた人達でもある．これと平行して心理学的な立場から性格類型を展開しているものは C. G. Jung, J. P. Guilford などが代表的であるが W. H. Sheldon のような発生学的立場からの類型研究も無視出来ないものがあろう．

問題は斯る性格の基礎的類型論よりも，如何にして「性格」というものを判定し，または診断したらよいかという具体的方法論においての研究線がここで浮彫りにされてこざるを得ないのである．ただし，この場合では，つかまえられるものが一般性格というものよりも個別的な品格性といったものの

特徴の方に重点がおかれてくることは争われない．たとえば H. Rorschach の検査法，TAT. CAT. Blacky, Szondi, Rosenzweig, Wartegg などのテストがあり，更には MMPI, Guilford や Cattell の質問紙法，SCT 法などもあげることが出来よう．こういう広い意味で考えれば知能テストなども性格の一端を捕える方法と考えられるかも知れない．

以上のように一般には投射テストと非投射テストに大別出来るが，客観性，主観性という問題は性格調査に止らず常にあらゆる調査につきまとう中心課題であり，いずれがよりよく正しいかどうかという価値判断は極めて困難であろう．恐らく真理や真実は以上のいろいろの調査結果について共通一致点の領域こそが，その性格特徴を暗示するものと言わざるを得ない．しかし問題は精神病理学的分野と精神分析学的分野と医学的分野との連結研究が不足しているとも言える．それは学問的体系のための理論研究であって，人類それ自体の研究体制ではないという批判も出てこよう．

というのは生理心理学とか社会心理学とかいろいろの学者的論理体系があるにしても，つまるところ，それは既存のワク組からの論理構成から人間の性格を見るという態度であり，方法論として，それしかないから，そういう仕方でやる方が学会という名の体系論において，現実的には妥当性を持っていると言わざるを得ないという意味でもある．だが性格という問題は，今までの自然科学的概念つまり客観性的妥当性という判断に属する対象であるか否か，また性格分類とか性格類型とかの概念を，勝手に決定出来るものかどうかをも再吟味する必要があると思われる．

要するに，何故性格というものが問題とされねばならないかという．目的論的哲学を抜きにしてギリシヤ以来の科学的方法論のみが正しいとか，客観的真理とか言っているが，それ自体の再検討，再反省こそが，実は現代における性格理論の中で要請されているものではなかろうか．

問題は複雑である，というのは性格論というものを，自然科学的合理主義的価値判断の下になされ得べき対象であるか，それとも超合理主義，または非合理主義的判断の下になされるべきか……それ自体が問題であるからである．現在までの論説を見ると，クレッチマーの如き人々でも，内閉性的気質とか，躁うつ性または同調性気質とかの概念構成の根底には，形質遺伝学的なベースによる判断を持っており，体質—素質—反応の三要素を性格の持つ意味としているものや，逆に性格，能力，気質の組み合せが個性であるといった考えで，気質と性格とを同要素的に取扱っている社会心理学的な研究概念もある．

したがって一定の理解概念に未だ到達していないのではないかとも思われる．

本稿で使用する性格とは，行動的なもの，気質的なもの，表現的なもの，功利的なもの，自己反応的なものを要素として，その傾向を理論的に把握しようとするもので，更に心理類型として，Y—G テストに用いられるものを採用することにした．また今までのテストの中によく用いられる対立要素の導入も考慮して，プラス面，マイナス面の両面からある特徴を捕えようとの試みも併せ行なったもので，49項目の性格を調査者自身に選択させる方法で調査を行なったものである．

したがって本調査は構成的妥当性を求め，更に因子的妥当性を求め得るように工夫したものであると言ってよい．勿論こうした性格類型論的研究に対して一方サイコソマティクスの研究分野からの異論もないわけではない．

ともに人間性の理解という目標においては同じ志向を持っているが，問題は常に既製的なワク組にのみ頼って能事終れりとする公式論に対する反駁と見られる．しかし本稿では性格学そのものを論ずるのではない．問題は人口資質という多分に集団人群の本質に対して如何に迫ったらよいかということが課題なのでもあり，身体，精神的な事象に関して可能な方法論を拘束なく取って行きたいということでもある．

以下述べることがらは以上の前提の下に調査結果について論述することにする.*

2) 自己判断した性格 type

自分の性格についての選択結果は日本人男子は, 92.7% のものが「正直」と思っており, 次いで「裏表がない」というもの, 82.7%である. この選択順位は, 25歳以上の全年齢について全く同じである. このような性格を代表する年齢層は40〜44歳で, この年齢を境として, 高年齢に行く程, 割合は高くなり, 低年齢に行く程, 割合は低くなる. つまり"お人好し,, と言われ"単純,, と言われるものとに似通ってもいる. しかし20〜24歳層は, この順位を全くくっがえし, 第1は「気のつく方」で次が「明るいたち」を取っている. そして第3位に「正直」が出てくる. 25〜29歳は第3位に「明るいたち」を好むが, 30〜34歳, 35〜39歳, 40〜44歳では「がまん強さ」が示される. この順位は60〜64歳, 65〜69歳と同様でこれら高年齢層も「がまん強い」のが第3位で, 45〜46歳, 50〜54歳, 55〜59歳では, むしろ「気がつく方」という性格が多い. ところが70歳以上になると「きちょうめん」という性格が上位である. したがって, 20〜24歳と70歳以上では, 性格的にかなりの距りがあることが示唆されよう. これを端的に示すものとしては「新しいことにもすぐなれる」という性格があるが, 20〜24歳, 25〜29歳, 30〜34歳では, これが第4位に取られているが, 35歳〜49歳の年齢になるとこの性格は第5位に下り, 60歳以上では殆んど10位以内には取られていない. 年齢的に見て, 前進的性格と保守的な性格とが, この状況からも察せられる. これと逆の性格を示すものが「目上の人と遠慮なく議論する」というものである. この性格は上位10位以内に示される年齢層は54歳までで, 55歳以

---

* 本研究に関連した参考文献を掲げると次のとおりである.

Kretschmer, E. Körperbau und Charakter, 1926
Jung, C. G. Psychological Types, 1923
Sheldon, M. S. Condition aflecting the fakability of Teacher-Selection Inventories. Fduc. psychol. Measmt, 1959
戸川行男 性格の類型 1949
辻岡美延 新性格検査法 1967
相場 均 性格 1963
守田 保 実際的個性調査法 1928
Fawcett J. T. Psychology and Population 1970
懸田克躬他 異常心理学講座 第2巻 心理テスト 1969
高良武久他 現代の精神衛生講座 社会問題としての精神衛生 1966
肥田野直他 心理教育統計学 1968
Centers, R. The psychology of Social classes 1949
堀 要 サイコソマティクスに必要な人間理解の諸問題 1964
統計数理研究所 国民性の研究 1968年全国調査
国民生活研究所 生活意識に関する研究 1969
古沢頼雄 心理診断の技術 子どもと家庭 1966
科学技術庁 人間科学に関する総合研究 1965
南 博 社会心理学入門 1967
Kluckhohn, C. Personality in Culture, Mirror for man 1950
依田新, 築島謙三 日本人の性格 1970
津留 宏 性差心理学 1970

上になると全く影をひそめており，この代りに登場してくるのが「おとなしく人の言う事を聞く」というタイプである．これと同様の傾向を示すものが「動作がきびきびしている」という性格で，54歳までである．

各年齢間において上位10位内に入る主な性格で差のあるものを拾って見ると，前述した「目上のものと遠慮なく議論する」「新しいことにもすぐなれる」「きちょうめん」「口数が少い」「動作がきびきびしている」「気が短い」「おとなしく人の言を聞く」といったもので，確かに若年層と老年層との間には大きな距りがある．

しかし各年齢に共通して上位10位内に取られている性格は「正直」「裏表がない」「明るいたち」「がまん強さ」「気がつく方」「誰れとでもよく話す」の6性格で取得順位に多少の上下はあっても大体日本人の一般的な性格類型を代表するもののように思われる．

したがって日本人男子における本調査の総計取得順位では，次のような類型順位を示すこととなった．

すなわち「正直」で「裏表がなく」しかも「我慢強く」て「気がつく方」であり，「明るいたち」を好んで「新しいことにもすぐなれる」傾向を示し，したがって「誰れとでもよく話す」が「口数は少く」ひかえ目である．しかし何かあることに引っかかると「目上の人とも遠慮なく議論する」性格を秘めており，「きちょうめん」さを底に持っているということになる．以上が表層的発現性格像と一応名付けることとする．

更に順位をたどって類型輪郭を示すと，内面的に「短気」であり，「動作がきびきび」として行動的なところがあり「人と広くつき合う」ことが好きなくせに「心配性」でくよくよする面を持っている．したがって「おとなしく人の言うことを聞く」かと思うとすぐ「感情的」になり，そして「考えこんでしまう」という傾向を示す．そして「時々自分をつまらぬ人間と思った」りする卑下感を持つ反面，反動的に「のんき」な軽薄さが出てくる．このため分裂的状況として「決心がなかなかつかず」優柔不断的な性格が顔を出してくるということになる．

こうした第二次的性格層を，条件反射的性格像と名づけておこう．すなわち第一次層の表層的発現性格像を条件づける意味を持っているということである．

以上20性格は，いずれも50％以上の人々によって取得判断されているものであるが，次のものは40％～50％の人々による性格でもある．それは「人におごることが好き」で「人のあつかいがうまく」「現状に満足しており」「会などで人の先に立って働らく」というものがこの層の上位である．しかし，「もっと違った境遇に生れたかった」というもの，「忘れっぽさ」や「人をほめるのが好き」で「物事を深く考えない」という性格もこれに続き，したがって，何んでも「あけすけ」で，次には「1人でいたい」という自閉的な面も出てくるものである．これらの性格はどれも中心がはっきりしない．その場限りの性格質のものばかりである．換言すると，幼稚な未熟な流動的性格像でもある．御都合主義的中間像でもあろう．

次の第4層のものは極めて後退的な面と反動的な面とが入りまじった性格像で占められているもので，28％～38％の巾で取得されているものである．つまり「小さなことを気に病み」「たびたび憂うつ」になり「空想にのみふけって」「人に礼を言うが面倒臭く」「すぐ不機嫌」になったりする．一種の自己中心的であるため，次に「貸したものはすぐ忘れる」かと思うと「お祭り騒ぎがすき」で「他人に頼まれてもすぐやらず」勝手なことは「大胆で冒険」を好み，そのくせ「心配で眠れない」といった性格群で占められる．第三層が多少とも無邪気な御都合像なら，この層はやや我がままなナルシズム像を示す性格層とも言える．つまり一種の内向的マイナス面を示すと言える．

第5層としては最も好まれなかった性格像であるが，12%～27%に見られているタイプである．すなわち「何かにつけて自信がなく」そのくせ「おしゃべりで口数は多く」「人の親切には下心があって不安」がっており，自分は「けちんぼ」で「投げやり」そして「のろま」である．その上「秘密が好き」で「人の持物のみが気になり」「ついうそをつく」といった性格像でやや知能的にも問題になるような性格群でもある．

以上が日本人男子の性格群像であるが，女子について見ると，男子と殆んど大差がないが細かな点での差異は女子の20～24歳は男子と違って，やはり「正直」が第1位であること，また第3位に「心配性」というのが他の年齢層よりも上位に表われていること，そして「感情的」というのが30歳以上の上位10位内には見られないのに，この若年齢では第5位を占め，しかも71.4%の選択率でかなり高いことが注目を引く．したがって「小さな事にも気にも病む」という性格も第8位に上昇しており，他の年齢には見られないものが表われているということである．こうした性格取得状況は男子の20～24歳にも見られなかったもので．確かに性格構造上，20～24歳は年齢差と性差との二重格差を示す世代と言ってよい．また50歳以上の女子には「忘れっぽい」という性格が上位10位内に表われてくるが，これは男子には見られなかった現象である．

また「おとなしく人の言うことを聞く」という性格は60歳前には上位性格には見られなかったものであるが，女子では40歳から従順さが見られ，これと反対に「新しいことにもすぐなれる」というような柔軟性は45歳で終っている．また「現状に満足している」というものが上位10位内に進出する年齢は男子では60歳以上にならないと出てこないものであるが，女子では50歳で早くも表われ，したがって「目上のものと遠慮なく議論する」というような勝気なものは全年齢を通じて上位には示されていない．これも男性と異なった性格の表われ方であろう．

したがって総計して男子と異なる表層像は「心配性」で「時々自分を下らなく思い」「感情的」になるということで，第2次層では「小なことをくよくよ」し，しかも「忘れっぽさ」があって不平不満として「もっと違う境遇に生れればよかった」と嘆く．つまり男子が表面化しているものを潜在化しているとも言えよう．以上が50%以上を示す取得性格である．

次の第3次選択性格で男子と異なるものは「たびたび憂うつ」になることである．また次の第4次層では，男子と異なって上位に表われているものでは「何かにつけて自信のなさ」であり，そのくせ「口数の多い」ことで，しかも「のろま」というのが目立っている．したがって第5次の最低層では以上の順位の上下が残された性格となるが，この層では．むしろ男女共通のものを見た方が有意義であろう．すなわち，男女とも「けちんぼ」「人の親切には下心あり」「投げやり」「秘密が好き」「ついうそをついてしまう」といったものである．

要約すると男女の性格でその選択取得率順位の最も異なる性格は「目上の人と遠慮なく議論するかしないか」「会などに人の先に立って働らくか否か」「人のあつかいがうまいか下手か」「気が短い」か「動作がキビキビ」しているかどうかであり，これは男子が女子より多い性格である．ところが女子の方に多く取られているものは「小さなことを気に病む」性格で，次が「何かにつけての自信のなさ」「時に自分をつまらぬと考える」「たびたびの憂うつ」「口数が多い」という性格であるといってよい．

以上が日本人男女について人口資質論的に捕えられた性格像である．

この性格像についての善悪是非の価値判断は，これらの人口がおかれた生活環境条件因子によって変化することは避けられない事実であり，判定は困難であるが，1968年に行なわれた「国民性の研究」では，長所として次の事項が載せられている．

すなわち「合理性」「勤勉」「自由を尊ぶ」「淡白」「ねばり強い」「親切」「独創性に富む」「礼儀正しい」「明朗」「理想を求める」という10項目である．

1958年，1963年，1968年の3回にわたる調査結果が示されているが，この中の主なものを述べると「勤勉さ」には大差なく60%を示し，また「ねばり強い」というものが1958年48%から68年50%と上昇していた．この外割合の高いものでは「親切」というのがあるが，これは58年50%，63年42%，68年45%で下降停滞傾向である「礼儀正しい」というものも47%位で特に変化がない．

以上の世論調査事項の中で資質調査事項と同系のものは「明朗」という項目と「合理的」ということをきちょうめんということと同義語に解すれば，この二つである．世論調査では「合理的」は68年，男子は12%女子は9%を示していたが本調査では男女とも60%を越しており多少意味が異なって取られている．また「明るいたち」も男10%，女16%しかないが本調査では男女とも70%を越している．これらの相違は世論調査が一般に日本人の印象性格という面で捕えているに反して，本調査は「あなた自身はどの性格か」という設問でやや本音に近い聞き方をした点にあるように思われる．しかし，他人が見る目と本人が本人を見る欲目というものの差も問題点として残ることがらであろう．次に世論調査では短所として，次のものがあげられている．「けちん坊，気が短い，ずるい，熱し易くさめ易い，残忍，軽薄，しゅうねん深い，島国的，傲慢，模倣的」で，これらの中，最も多く取られている性格は，気が短い（63年52%，68年49%），熱し易くさめやすい（63年49%，68年47%），島国的（63年49%，68年39%）であった．以上の中で「けちんぼ」と「気が短い」は本調査でも取られた事項で，本調査では「けちんぼ」が，男子23.6%，女子24.1%に見られたが，世論調査では男子68年21%，女子68年20%で，かなり接近した数

図1　年齢別性格表（男子）
（上位30%以上取得性格）

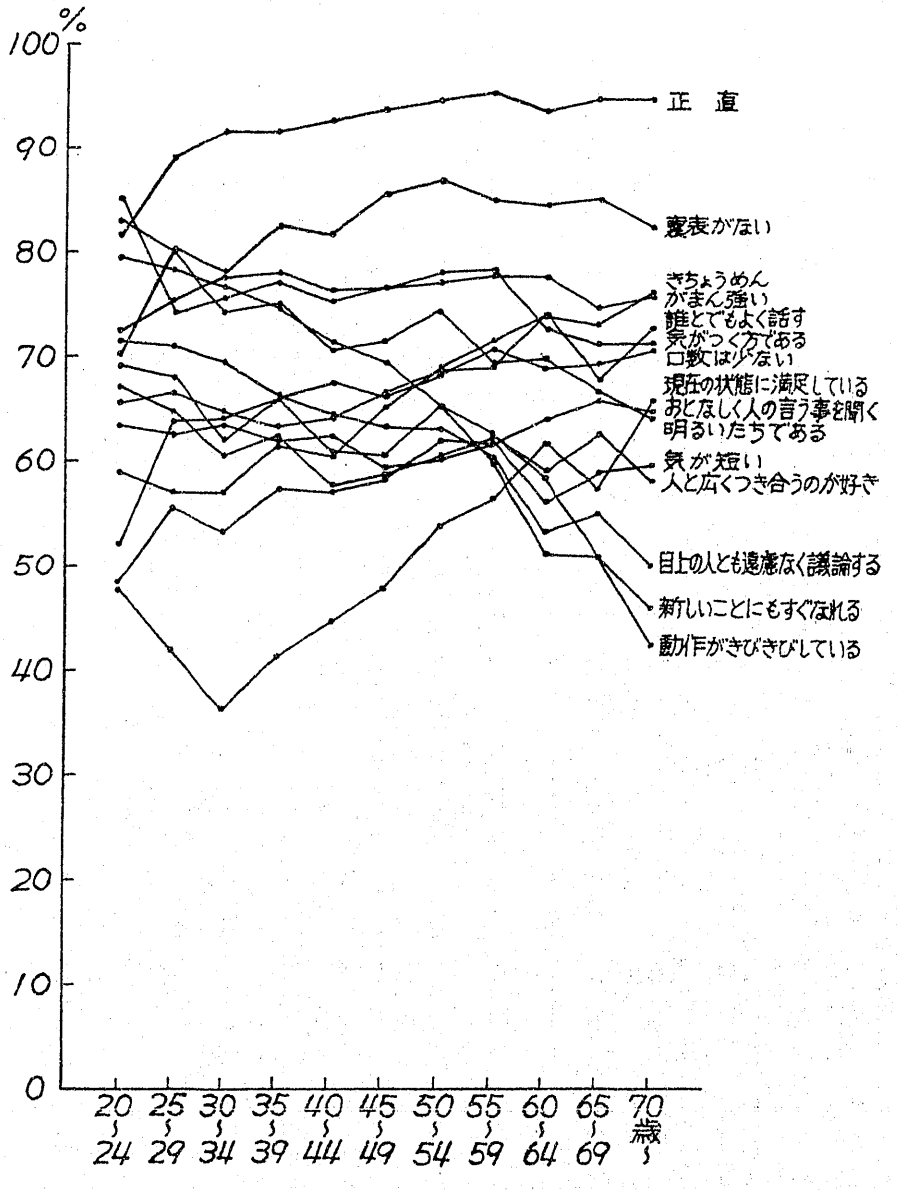
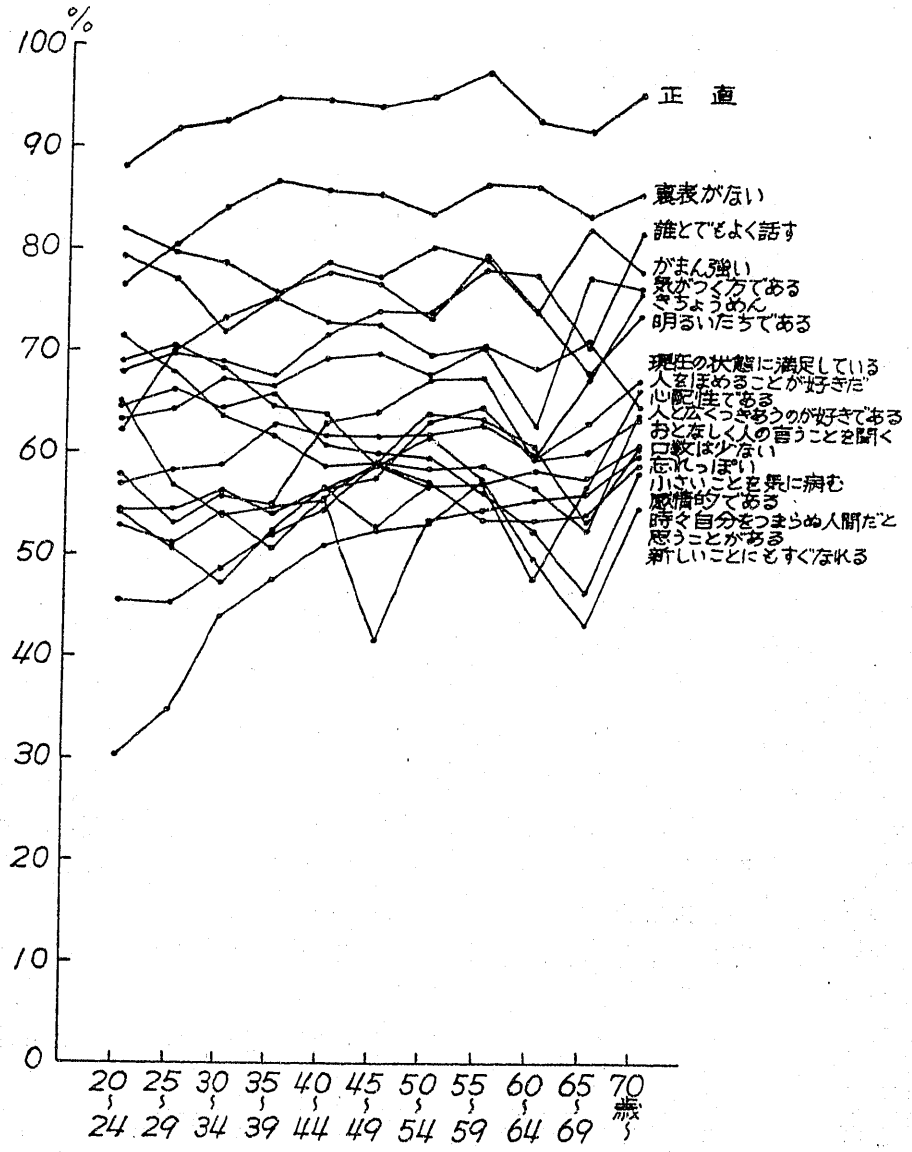


図 2　年 齢 別 性 格 表（女子）
（上位30％以上取得性格）



値である．次の「気が短い」は本調査，男子61.6％，女子49.9％に対し，世論調査は男子68年52％，女子68年46％であった．したがって割合に若干の差が見られるが男女の傾向は同一方向である．ということは，長所において主観，客観の選択が異なるが，短所と見られる点ではかなり類似した選択がなされていると考えられよう．

また以上の外，世論調査では「ねばり強い」という事項があるが，これと対応する項目には本調査では「がまん強い」というものがあるが，前者の選択比率が男子68年57％，女子68年59％を示すに対し，本調査では男子76.9％，女子75％である．この相違は前者が前向きの意味を持った強さに対し，後者は受身的の意味を持ったニューアンスの差の取り方にあるように思われる．忍耐を美徳としてきた価値観が，スタミナ価値観より根強く残っていることは争われまい．

更に類似項は「模倣的」と「新しいことにすぐなれる」ということであるが，前者は男子68年32％，女子68年23％を示すが，後者は男69.5％，女子63.8％である．この差は前者が受身的で後者が適応的な意味の違いにあると見られる．以上，いずれにしても，日本人の性格一般類型は客観的印象にしても主観的判断にしても，次の如き type が輪郭付けられそうである．

積極的な面としては，正直で勤勉さがありがまん強さとねばり強さも持ち，気がつく方で礼儀も正しく親切で明るさも失わず，新しいこと求める性格もあり，合理性も次第に芽生えてきているということである．次に消極面としては，気が短かく，したがって熱し易く冷め易い傾向を示し，自閉的で優柔不断的な性格があり，模倣性が好きで適当に人の言に左右され反面けちんぼであると言うことである．

最後に日本人の性格で上位10位を占めるもののグラフを掲げることとする.

3) 夫妻関係における性格像

本調査が夫妻を対象としたため，此処に夫妻相互の一致，不一致という性格問題を探究するのに好都合な資料を得ることが出来た．俗に「似たもの夫婦」という通用語があるが果して夫妻で同一性格を取得判断したものが如何なる性格に多いか，また夫妻の一致率は49項目選択中何%であるかということも興味の対象となる.

49項目の中で夫妻が一致して取った性格は前述した上位取得数と略々同じものであるが．「正直」(87.9%一致)，「裏表がない」(72%一致)，「明るいたち」(58.5%一致)，「がまん強い」(58.1%一致)，「気のつく方」(52.5%一致)，「誰れとでもよく話す」(49,2%一致)，「新しいことにもすぐなれる」(48.1%一致)，「心配性」(44.4%一致)，「きちょうめん」(40.7%一致)，「時々自分をつまらぬ人間と思う」(38%一致）が上位10位を占めた．逆に最も夫妻で一致の少ない性格は，「ついうそをつく」というもので，次が「秘密が好き」「人の持物が気になる」「投げやり」「のろま」「大胆で冒険好き」「けちんぼ」「人の親切には下心あって不安」「人から頼まれてもすぐやらない」「口数が多い」という順位である.

確かに夫妻とも両方で，うそをつき合っていたり，投げやりであったり，のろまであって，けちんぼであれば周囲からは信用されなくなろう．夫妻の性格の一致率は総平均 27.3% ± 2.6 でおおよそ4分の1の夫妻が性格上，好ましい傾向を示していることになる.

次に夫妻で反対の傾向を示す性格を取るものについて探究して見ることにする．つまり本質問事項作成に当って矛盾型として相対立する事項を取り入れたのであるが，たとえば「動作きびきび」に対し「のろま」「きちょうめん」に対し「投げやり」「口数が多い」に対し「口数は少い」「がまん強い」に対し「気が短い」といった対立性格事項が20対40項目ある．これは被調査者が合理的な選択判断をしていれば，いずれかを取り決して矛盾した選択はしないであろうという合理的注意度の問題を示唆することの意味と，更に如何に上手に選択粉飾しようとも，自己判断が斯る矛盾した性格を取らざるを得ない程の自分の性格であると判定せざるを得なかったという意味が，これらの対立性格選択には秘められている.

いずれにしても実際調査時においては双方の理由がからみ合って，その結果選択されていると見る方が妥当である.

とにかく，こうした矛盾的性格を取ったものの中で最も高い割合を示すものが，男子では「気が短い」というものと「がまん強い」という性格の相反で45%の人々にこれが見られる．これは若し時系列的に発現するということで捕えられているとすれば，この性格はクレッチマーの粘着性気質に該当することになる．つまり粘着と爆発の共存でもある．これは女子においても34%の占有率を示して最も高い．次の相反性格は男子では「おとなしく人の言うことを聞く」と「目上のものと遠慮なく議論する」という両性格の共存で33%の人人に取られている．女子ではこの共存率は少く，むしろ「心配性」と「のんきさ」の相反共存性格のものの方が多い．第3位に多いものは「新しいことにもすぐなれる」といいながら「なかなか決心がつかずモタモタする」性格の共存が男子であるが，女子では「明るいたち」と「憂うつになる」ものとの共存である．これは，同調性気質を思わしめるものがある．つまり躁うつ性格で結局，こうした個性は，喜びと不平のみを語る傾向を示し社会生産的には，いてもいなくてもよい人物ということにもなる．これが32.5%に見られている.

あと主なものをあげると男女とも「忘れっぽさ」と「気がつく」という相反共存性格である．更に

女子では男子第3位に示された「優柔不断性」と「新しいものへの順応」の共存が30%以上で高い．このように見てくると，男性では対環境に対する反応型において相反矛盾的な類型が多く，女子は内向的反応において相反矛盾的な類型が多い．平均化して見れば，男子の相反共存率は16.4%±2.6%で，女子の平均15.6%±2.5%より見かけ上多く示されているが実質的には性差はないと見るべきである．

以上のような性別相反の性格状況であるが，自己内での相反共存の場合と，夫婦という相性という問題に立ち入って見ると，これらの矛盾不一致は確かに問題を提起しよう．俗に性格の不一致ということが離婚の理由にあげられるが，果してこれら相反する性格の夫妻の組合せ率は如何程であるかを探求して見ることにする．

夫妻で最も相反した性格を取るものは，夫が「気が短い」に対して妻が「がまん強い」という夫妻である．これは夫妻という関係で見ると，こうした組合せであるから調和しているとも言えよう．これが46.6%の夫妻に見られ，案外過去の夫婦像を示唆しているものかも知れない．次が夫が「気がつく方」なのに妻が「忘れっぽい」という組合せで40.6%に見られている．この逆の組合せ，つまり，妻が気がつき，夫が忘れっぽいというのは30.5%に止まり，案外，主人公の方が気をつけているものが多い．次が前述した気の短かさが妻で夫が「がまん」しているというケースで38.6%の夫婦に示されている．これと略々同程度に見られる組合せは，夫が「のんき」で妻が「心配性」でくよくよしている夫婦である．この逆の場合は30.4%で少ない．次が夫は「新しいことにすぐなれる」のに妻は「優柔不断」型のもので38.1%を占め，この逆のケースは31.5%に止まっていた．また奇妙なことには妻が「目上のものと遠慮なく議論」するのに夫の方は「おとなしく人の言うことを聞く」という夫婦が37.7%で，この逆のケース24.4%を大きく上回っているということである．次の相反性格では夫が「明るく」妻が「暗い」という夫婦が34%で，妻が「明るく」夫が「暗い」という夫婦(28.6%)より多く示された．

以上が30%以上を占める夫妻の相反性格の組合せ状況であるが，このような相反性格夫婦の中で最も少い組合せのものは，夫が「人の持物が気になる」のに妻は「人に貸したものはすぐ忘れて」しまうものである．しかし，このような夫婦も4.2%には見られている．また，夫が「あけすけ」で妻が「秘密が好き」という夫婦(4.6%)も少ない．以上総計すると夫婦の相反性格組は20%に見られるということであるが，これらは自己性格では矛盾的傾向を示すが夫婦では相互補完的な役割を果たしているとも考えられる．

4) 心理的資質からの性格問題

本調査事項の中には24項目について心理的状況の一端を捕えるためのものが加味されているが，これをY—Gテストの分類にしたがって要約し追求することにする．

たとえば「時々自分をつまらぬもの」と考えたり「たびたび憂うつ」になるという性格は，“抑うつ性„ として捕えられ「心配性」とか「小さいことを気に病む」というものは“神経質„ として分類されるという仕方である．

Y—G分類では12類型になっているが“抑うつ性„“回帰性„“劣等感„“神経質„“非客観性„“非協調性„“愛想悪し„“一般的活動性„“のんき性„“思考的外向性„“支配性„“社会的外向性„がそれである．

以上の分類によって日本人の性格は如何なる心理的資質を示すかを見ると，1類型ごとに2項目の同類項があるが，とにかく，いずれか1項目でも選択してあるものを含めれば心理傾向としては日本

人男子の第1の類型は，「愛想が悪い」ということである．しかし次が「一般的活動性」に富んでいると言える．そして「社会的に外向性」を持っていることは「思考的にも外向性」を示す傾向のものがこれに次いでいると言える．しかし後に，むら気といわれる，「回帰性」が強く永続的な心理傾向がやや弱い．次いで「支配性」や「のんき性」「神経質」「抑うつ性」「劣等感」「非協調性」「非客観性」という順序になる．しかし以上は傾向としての順位であるが，心理的強度という点から見ると，むしろ第1は「社会的外向性」の方が強く，更に「一般活動性」が強いと言える．そして第3に「愛想が悪い」のである．そして更に「神経質」になっている．このことは表面的傾向としては「思考的な外向性」が第4位に出てくるが，強度から言うとこれは第8位に下っており，まさに「神経質」が表面的には後退しているかに見えて，その実，かなり神経質の度合が強く出ていることと対照的である．そしてこの強さにおいて「支配性」が続き「抑うつ性」「回帰性」「思考外向性」「劣等感」「のんき性」「非協調性」「非客観性」と続いてくる．

女子について同様に斯る分類基盤で見ると，傾向として「思考的外向性」が最も多く「神経質」と「社会的外向性」が略々同じ割合でこれに次いでいる．更に「一般的活動性」「抑うつ性」「回帰性」「愛想悪し」「劣等感」「非協調性」「非客観性」「支配性」「のんき性」という順位になり，またその強さの点からは，「神経質」が最も多く，「社会的外向性」「思考的外向性」「一般的活動性」「抑うつ性」「劣等感」「回帰性」「愛想悪し」「支配性」「のんき性」「非協調性」「非客観性」ということになる．

これを更に6つのカテゴリーに要約して見ると，Y—G方式では「抑うつ性」「回帰性」「劣等感」「神経質」を“情緒不安定因子„とし，「非客観性」「非協調性」「愛想悪し」の三性格を，“社会不適応因子„また「愛想悪し」「一般活動性」を“活動因子„としている．更に「一般活動性」と「のんき性」は“衝動性因子„「のんき性」「思考的外向性」を“非内省性因子„「支配性」と「社会的外向性」を“主導性因子„としてグループ別けをしてプロフィール作成をし判定に供している．本調査は必ずしも“はい„“いいえ„式の多数回答式を採用しているわけではないから斯る「素質性の原理」および「因子的真実性の原理」の下に解析することは不可能である．また性格問題はその前提条件，更にはその問題意識によって，さまざまなインベントリーが取られよう．したがって本稿では6グループ別の要約によって一応の解説を試みるということで，その内容の手続きは異なっていることを改めて断っておく必要がある．しかし以上の区分けによるまとめ方も「愛想悪し」と「一般的活動性」「のんき性」は双方にまたがって組み入れられており，特に“衝動性因子„としてこの「一般活動性」と「のんき性」を要素としている枠組は，生物学的路線からは何を根拠として“衝動性„とした概念構成かやや疑問的なカテゴリーに入るであろう．このような批判は既にサイコソマの分野からも出されている問題であるが，人口資質論的な概念からの突込みはそれが正しいか正しくないかという価値判断や，その基準を問題にする前に，斯る価値体系自体が如何なる要因の下に成立し得るか，また，既存の体系があり得るとすれば，それは社会経済，広くは生活環境因子，更には遺伝学的な要因を如何なる相関の下に成立し得るものなのかを探究しなければならないのである．この意味で諸多の研究者の研究線をたどりつつも更に別の目的を求めて研究するという態度を取るということに外ならない．

一応本稿では，斯る性格像の輪郭を求めて資質の異同差別を追求するということに止まるものである．

かくして以上の6グループの要約の中で，重複していないものをとると“情緒不安定性„“社会不適応性„“非内省性„“主導性„の4分類型となる．したがって，この4型について比較検討して見よう．

本製表では濃度の強いもののみを取ることにした．

表 1　性格類型の比較

	男	女
情緒不安定性傾向	26.4%	35.4%
社会不適応性傾向	22.7%	17.2%
非内省性傾向	19.9%	28.4%
主導性傾向	39.5%	34.3%

以上の要約によると，男子は主導性傾向のもが最も多く取られるに反して，女子では情緒不安定性の傾向の方が多いことが示され，次いで男子は，情緒不安定性，女子は主導性と順位が入れ替っていることが分かる．また社会不適応性の傾向は男子に多く見られ，女子では非内省性の傾向が強く，これも順位が男女で入れ替っている．

以上のことを逆の表現によって言い直すと，男子は，内省性が強く，そして社会に適応せんとする傾向を示し，情緒を安定せしめるが，極めて服従性を嫌う傾向を示しているに反し，女子は，先ず社会に適応せんとする性格を持ち，そして内省しながら，次に服従性を持って，情緒を安定せしめるという方向が強いということになる．

更に以上のような解説方式以外に次の如き要約によることも出来よう．一応これを恐縮ながら筆者の名前をとって「篠崎類型方式」として見る．つまり「動作がきびきび」とか「人のあつかいがうまい」「大胆で冒険好」といった主として行動的なカテゴリーを中心にするものを一括して“行動類型,,とし，「口数が多い少ない」とか「人をほめることが好き」「目上と遠慮なく議論する」といった言語表現的なカテゴリーに入るものを“表現類型,,とする．更に「気が短い」「がまん強い」「明るいたち」「心配性」といった主として，内面的な性質を中心とするカテゴリーのものをまとめて“気質類型,,とし「人におごることが好き」とか「けちんぼ」「人の持物が気になる」といった利害的な判断を中心とするカテゴリーに入るものは“功利類型,,とし「考えごとが好き」「考えない」「現状に満足」といったものは一括，自己に反応しているものとして“自己反応類型,,としてまとめて見ることである．

本調査において49項目の選択数は6,532人が総計男子で83,780事項を取得したが平均12.8項の自己性格を認定，女子は総計147,036項の選択により平均22.5項を自己認定していることになり，女子の方が性格選択反応は多い．逆に1事項当り平均何人が選択したかを見ると男子で1,710人，女子では3,000人ということである．このことは性格問題については男子より女子の方が，はるかに関心度が高いことを告げている．

さて以上の5分類による篠崎類型によって一般の通型を見ると，その選択序列は，男子で「気質—表現—行動—自己反応—功利」となるが．女子の通型序列はやや異なっており「気質—自己反応—表現—行動—功利」ということで中間順位に変動が見られる．気質に発し功利に終ることは男女とも同様であるが，その順位ケースが，男子は，先ず何等かの表現を行ない，次に行動を起し，そして自己反応で確かめるということになるが，女子では気質の後に先ず自己反応をしてしまい．それから表現し行動するというところに相違がある．

以上のような一般的類型に対し，特に昭和45年度研究所年報において指摘した如く問題となる20～24歳の類型を比較して見ると，男子は「気質—行動—表現—自己反応—功利」となって，確かに行動面の方が表現より上位に示され異なっている．しかし20～24歳の女子は一般的

図 3　男女別性格類型—全体

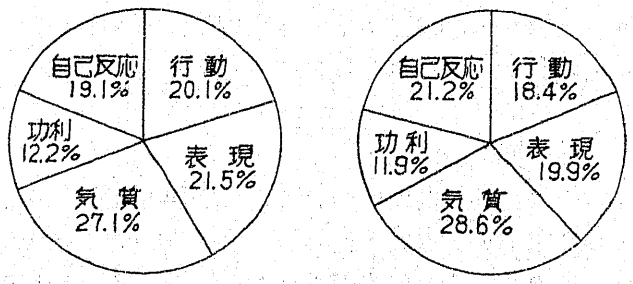


図 4 男女別性格類型 ― 市

男　子　　女　子

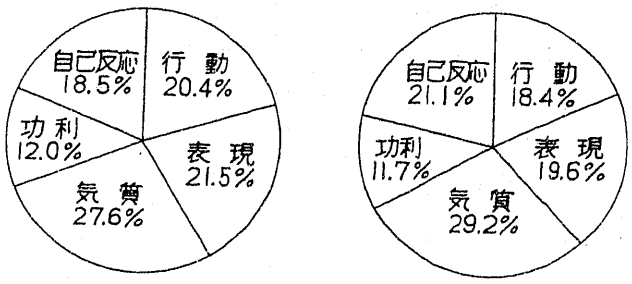
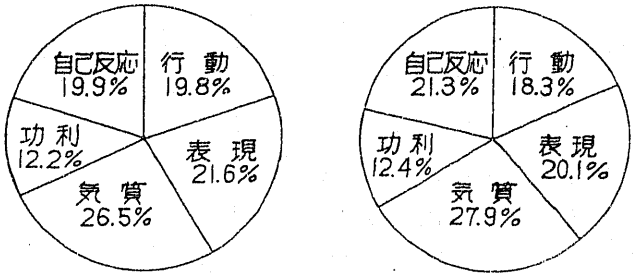


図 5 男女別性格類型 ― 郡

男　子　　女　子



類型と略々同様な傾向で大差がない．ただ強いて言えば，行動と表現が非常に近い取得数で接近しているといえる．

次に問題となる年齢は70歳以上の老人である．この選択性格は男子では「気質―表現―自己反応―行動―功利」となり，一般型との違いは行動型が下位となり自己反応型が上位になって入れ替っている．また女子では，「気質―表現≒自己反応―行動―功利」となり，一般の類型とは自己反応と表現が入れ替っているように見えるが実は，表現型と自己反応型とは略々等しい割合である．

男女とも25歳から一般型と同様の状況を示すに到り，65歳からは男子が老人型となるが，女子は65～69歳では未だ一般類型と同様のタイプである．

次に市生活者と郡部生活者の相違を図示すると次の如くであるが，全体傾向のものと大差ないが，ただ，郡部生活者の男子では行動型よりも，自己反応型の方がやや強い傾向を示している．これは女子に見られた類型であり，女性化傾向を示すとも考えられる．

最後に夫妻の組合せ別に，これらの類型別状態を眺めることとする．夫妻とも同様の性格類型を取るものの中で，最も多いものは，「気質―気質」型である．そして次が「表現―表現」「自己反応―自己反応」「行動―行動」「功利―功利」という順位である．

夫妻の以上の類型組合せで異なったものを見ると，先ず，夫の行動型と表現型，気質型，功利型，自己反応型と妻の他の類型の組合せはこれと反対の組合せ，つまり妻の5類型と夫の他の4類型の組合せのものより凡て多いということである．ただ一つ例外がある．それは，気質型と功利型の組合せで，これは妻が気質型で夫が功利型のものが夫が気質型で妻が功利型のものより多いということである．

これら25組合型を順位別に示すと本調査対象の状況は次の如くになる．すなわち「夫気質―妻気質」「夫表現―妻気質」「夫気質―妻自己反応」「夫行動―妻気質」「夫自己反応―妻気質」「夫気質―妻表現」「夫気質―妻行動」「夫表現―妻自己反応」「夫表現―妻表現」「夫行動―妻自己反応」「夫自己反応―妻自己反応」「夫行動―妻表現」「夫表現―妻行動」「夫自己反応―妻表現」「夫行動―妻行動」「夫自己反応―妻行動」＝「夫功利―妻気質」「夫気質―妻功利」「夫表現―妻功利」＝「夫功利―妻自己反応」「夫行動―妻功利」「夫功利―妻表現」「夫自己反応―妻功利」「夫功利―妻行動」「夫功利―妻功利」である．

5）要　　約

日本人の性格問題についての調査結果は以上の如くであるが，こうした心理傾向や性格類型が如何なる意味で人口資質の他の要因とからみ合うかということは更に重大な今後の課題である．というのは，以上のような性格形成は偶然にその本人に取得され傾向付けられ定着したものか．それとも遺伝

的な暗号の下に方向付けられてきたものか．それともマーガレットミードの言うように，これらの人口を取り巻く文化環境条件によって規定されていったものかという問題に直面するからでもある．しかし更に今日的に問題になるのは生活する上での人間関係ということの中で心理的な摩擦やトラブルが今後重大な影響を与えてくるということであろう．勿論，人間関係の調和不調和は地域住民間や職場関係の中でプラス，マイナスの両面に働らき，共同生活する上での諸問題を提起するに違いない．こうした人間に密着したことがらは今までは無視的過少要因として捕えられていた．

しかし人口資質という面から見ると，こうした問題への認識こそ先ず重大であるということでもある．

結局，本調査の実情に関する限り，少くとも矛盾的と考えられる二重性がひそんでおり更に建前と本音がからみ合っていることを見落とすことは出来ない．ちょうど遺伝で優生劣性の因子のある如き関係，つまり染色体の対応一対の関係の如きものを想像するに足るものがある．

したがって人口資質論的には，これらの性格群が，その人間の個性や人間像というものを輪郭付けるが，それが，その人間像を分裂的方向へ行かしめるか発展的方向へ向かわしめるかが問題となろう．

The Problems of Population Quality: Centering around the Problems of Japanese Character

Nobuo SHINOZAKI

I have researched mainly the problems of population quality from the view-point of physical character till now. However I could not neglect the mental character. Then I surveyed the actual state of these problems from the point of socio-psychological view in 1969. The questionnaire is made of 7 items: — orientation, character, social class, value opinion, future vision of nation and the degree of concern and means of family planning — In this essay I write especially about the character. Already C Lombroso, E. Kraepelin, made the fundamental character-pattern and also C. G. Jung, J. P. Guilford, R. B. Cattell, W. H. Sheldon showed originally their inventories. Furthermore as a test, we might have given Rorschach test, TAT. IQ-test. SCT and etc. In my survey the character-test is composed of 49 items sugested by Y-G test and my pre-test. The main characters which 6532 Japanese couples self-selected by multiple-choice are as follows: in male honesty (92.7%) not double-dealer (82.7%) patient (77.0%) notice (75.9%) brightness (72.9%) adaptation for new state (69.6%) talking to everybody (66.7%) taciturn (66.6%) discussion for without hesitation (64.2%) punctilious (63.7%) and in female, honesty (93.7 %) not double-dealer (84.0%) brightness (77.2%) patient (75.0%) anxiousness (73.4%) talking to everybody (71.2%) notice (67.7%) adaptation for new state (63.8%) inferior humbleness (62.1%) sentimental (61.4%). Next this survey showed there is the most difference between 20–24 years old and over 70 years old about the way of thinking and the couples who self-selected the same characters are 27.3%.

Summarizing the character by Y·G method, the emotional-unstable inclination is 24.7% in male, 35.4% in female; social unsuitable inclination 22.7% in male, 17.2% in female; not introspective inclination 19.9% in male, 28.4% in female and leadership-inclination 39.5% in male, 34.3% in female. In addition, integrating according to my classified-form, I could show as next order in general; temperament — expression — action — self-response — utility in male and temperament — self-response — expression — action — utility in female. The people in a city life are same as a general order pattern, but the order pattern of men's characters in rural districts are inclining to the order pattern of women's characters.